

「ゆりの樹幼稚園の教育は 未来を切り開く 感動する脳 を作る!」その2

学校法人 高杉学園 学園長 高杉美稚子

今年は茂木健一郎さんの『感動する脳』を参考文献に、ゆりの樹幼稚園の教育と重ね合わせて考えてみます。

「少し小さい青の太い文字」で示したところは茂木健一郎さんの言葉をそのまま引用させて頂き、実線「—」は文章中略です。



創造性はすべての人間が持っている

「感動することをやめた人は、
生きていないのと同じである」

これは相対性理論を発見した20世紀の天才科学者と言われているアインシュタインが残した言葉です。人は生きていく中で、実に多くのものに会っています。たくさんの人と出会い、初めての町や風景に出会い、味わったことのない美味に出合う。その一つ一つに感動を覚えることで人生はキラキラと輝いてくる。

—(中略)—新しい発見に感動することがなかったら—
(中略)—それはもう、人間として生きていることには
ならない

—(中略)—今、私たちが生きている世界。もっと広い
言葉を使うなら、この宇宙。その中でいろんな物事に
目を向けて、新しい見方を得ていく。それこそが「感動」
であると私は思います。
そしてそのために必要なのが創造性です。人間は創造性に
生きることで「感動」という人間にしか味わえ
ないものを手に入れることが出来るのです。

—(中略)—「生きている」ということはすなわち、何
かを想像し続けていることなのです。 —(中略)—
創造的であること、いろんなものに感動しながら常に新鮮
な気持ちで生きていくということは、実は
「生きること」そのものであるのです。

「大切なのは意欲」

—(中略)—創造性の源になるのは何か、私は「意
欲」であると思っています。「意欲」がなければいかなる。
「創造性」も生まれません。反対に意欲さえ持っていれば
どんどん想像力はついてくる。

脳の機能もまた意欲を持つことで高まっていく。昔はこ
れを「やる気がある」という言い方をしました。

これが、ゆりの樹幼稚園が考える、三つの教育の二つ目



「驚育」にほかなりません

なぜだろう、不思議だなあと思ったことを解決する、そ
の時の驚きの体験—「驚育」—こそが、ゆりの樹幼稚園の
園児の「感動する脳を育てる」のです。

その体験は、自主選択保育「ドリカムタイム」、縦割り
保育でのワクワクタイム、クッキング、探検保育、冒険
保育、吉塚ゆりの樹の「キラキラタワーでの選択決断の
遊び体験」玄海、・地島ゆりの樹の「自然科学体験」な
どのなぜ不思議だなあと思ったことを探求する、やる気
を育てる**体感保育**そのものです。

そして同時に「わかった!」と納得するまでの時間
を大切に教育のプロセス、「共に育つ教育」「心
に響く教育」が大事なのです。

—(中略)—最近の脳科学の研究では、この
「やる気」こそが脳の機能を高めることがわかって
きた。つまり意欲を持つことの大切さは決して
精神論などではなく、非常に科学的根拠のあるも
のとして考えられるようになってきたのです。
意欲のないところに創造性は芽生えない、そして、
創造性のないところに感動というものはやってこ
ないと私は思っています。

そして、茂木健一郎さんは、
この感動は分化された感情が
集約されたものだといっています。



感情のレパートリーをフル活用する

人間と犬とを比較したとき決定的に違うのはその
感情の種類です。人間は他の動物と比べて、圧倒的
に喜怒哀楽を含めた感情のレパートリーが多い。

—(中略)—では、どうして人間の脳は多種
多様な感情のレパートリーを持ちえたのか。

—(中略)—基になる動物的な感情をどんどん
文化させることによって人間らしい感情のレパート
リーを増やしていったと考えられます。

—(中略)—そして、分化されたさまざまな感
情を再び集約した結果生まれたもっとも人間らしい
心の動きが「感動」でないかと思うのです。

—(中略)—人生を豊かに生きる為に、心に感
動を生み出すために、感情のレパートリーを精一杯
活用することが大事です。

これまでの、茂木健一郎さんの文章をわかりやすく逆
に図式化してみると

「感情の源→感情の分化→感情の統合→感動
→意欲→創造性」となるわけです。

このように簡略化してみると、これはまさしく、感情を大
切に育てる「**ゆりの樹幼稚園の教育理念10E**」や「**目指
す人間像**」と一致するところなのです。

「ゆりの樹幼稚園の教育理念10E」はもうみなさんよく御存じだと思います。



エコ・エンバイロメント

常に自分の心と体の健康に気をつけること。そのためには自分の周りの物的、人的環境を整えること。人的環境として、愛のある言葉、夢、希望が持て、勇気が出る言葉をしっかりとべる「心の朝ごはん」、そしていつも自分のことを理解してくれ、共感してくれる人を見つけておくこと、「心のウンチ」ができる場所があることが大切です。

エデュケーション・エモーション

エデュケーションは、ゆりの樹の三つの教育、三つのかわり、三つの柱です。そして、その実現の為に、「ゆりの樹の10E」があります。心の朝ごはん心と心のウンチを上手にすることが「ゆりの樹の10E」につながります。自分の行動がどのような、自分の心の奥底にある動機、感情に突き動かされているかが大切だからです。だから、感情・エモーションに気づくことが一番大切です。

自分がどのような感情、動機に突き動かされて行動しているのか気づかない限り、自分の行動は納得できなくなるのです。感情に気づけば、自己選択、自己決定ができ、自分を承認し、自信がつき、自分に自信があるから、自他分離し、他人も自分も「これでよし」と、共感し、そこに真の自立があります。これは、「ゆりの樹の教育方針」です。これが自他肯定です。自他肯定できるからこそ、素直な言葉が出てきます。自分の心の声、感情に素直であれば、他人の目を気にして、フリをしなくて済みます。

エンパワーメント・エンターテイメント・エンジョイ・エクセレント

人間力・エンパワーメント（自分がその道を進みたい《進むべきではなく進みたいという気持ち。他人がどう思うかを気にした「すべき」から「自分がどうしたい」のかという切り替えが大切。》それが人間力。人間力が増せば、他者を理解する事が出来る、どんな自分も受け入れる事が出来るようになるのです。

結果として、心がリラックスし、どんなことも楽しんで・エンジョイして取り組める大人に育っていくことが出来るようになるのです。そして次に、自分が楽しければ、人間はそれを伝えたくなる・エンターテイメントです。楽しんで、伝えて、伝わったら、嬉しくて、また伝えて、楽しんで、それが仲間づくり発展するのです。自分の感情、どうしたいかに気づいて、見返りを求めずにいれば、最後まであきらめないで、伝えるまで、伝え続けることもできるようになるのです。それが人生をエクセレントにするのです。

エクステンジ

自分の根本は変えられない部分もあります。どんなに努力をしても、結局、元のままだった、変れないと感じることもあるのです。そう感じるのも間違っていないのです。違う自分になることは苦しいのですね。



だからこそ、少しだけ行動を変えればいいのです。少しだけ行動を変えることが、人からは違って見える、人から成長したと見えるのです。だから、小さな行動ステップでいいのです。自分を客観的にみて、少しだけ行動を変えてみましょう。勇気をもって。そして、行動を変えることで、自分の中の奥底に、いつの間にか変化が起きているのです。それが成長です。

この「10E」で一番大切にしているのが感情に気づく教育です。では感情はいかにして育つのかです。

茂木健一郎さんの「感動する脳」から学ぶ前にすでに平成19年度と本年度のミセスカレッジで、また巻頭言でそのことをお話ししていますので再掲載します。

1、感情はどのようにして育つのか

私達大人は、子ども達に良い子に育てほしいあまりに、色々な要求をしてしまいがちです。「片付けなさい」「きれいにしなさい」「靴をそろえましょう」「お話を聞きなさい」「親のいうことを聞いてね」「静かにしなさい」「さっさとしなさい」「人に優しくしなさい」「思いやりをもちなさい」子どもに期待をしていないといつも、数え上げたらいくつになるでしょうか。

しかし、残念なことに、大人が言うとおりに子どもはするのでしょうか。言葉で伝えれば、子どもに伝わるかといえそうではありません。この中でも「片付けなさい」「きれいにしなさい」「靴をそろえましょう」「お話を聞きなさい」「親のいうことを聞いてね」「静かにしなさい」「さっさとしなさい」等は、目に見える行動なので、大人にもわかりやすいものです。

でも「人に優しくしなさい」「思いやりをもちなさい」という「優しさや思いやり」はその意味自体がわからない子どももいれば、またその捉え方が同じではないし、大人の前だけどう振舞えばいいかわかっている子もいて、本当の実態は他人には見えにくいものです。これは「優しさや思いやり」というものが物を片付けるというような目に見える行動ではなく抽象的なものだからです。

ではどのようにしたら、「優しさや思いやり」は育つのでしょうか。

赤ちゃんは、オムツが汚れた時泣きます。お腹が空いた時泣きます。ママがいなくて寂しい時も泣きます。それこそ火がついたように泣きます。

「オギャー。あーめんどくさい」「オギャーあーけだるい」「オギャー人が笑うから泣くのを止めよう」なんて赤ちゃんは一人もいないはず。生まれた時から、人間は感情をなくしてなどいなかったはず。もともと、豊かな感情を生まれもっているのです。ではなぜ、感情を押し殺したり、苦しいのに、苦しいといえずに、「お母さん大丈夫だよ」と言ってにっこり笑って、でも、リストカットしてしまう子どもになるのでしょうか。



そこに親や教師の子育てのあり方が関係してくるのです。赤ちゃんはオムツをきれいなものに変えてもらって不快な気持ちを心地よいものに変えてもらった時、安心して泣き止みます。

お腹が空いて嫌だった時、ミルクをもらって機嫌を良くします。ママがいなくて寂しかったけれど再び抱っこしてもらって安心して眠ります。「不快を快」に変えてもらうときに、自分の存在を受け止めてもらえたと感じ安心するのです。そこに人との間に基本的信頼感が芽生えます。

親のかかわりでもっとも大切なことは、精一杯の愛情を注ぎ、その存在そのものを受け止めてあげることです。基本的にはやはりこのことが感情を育てる為に根底に必要なことです。

その為には、言葉ばかりでなくスキンシップも重要です。そして次に、その時の気持ちをわかって、言葉に代えてあげることが大切です。「オムツ替えて気持ち良かったねえ」「ミルク飲んだから気持ちいいねえ」そしてその気持ちよさそうな顔を見て「そうなの。気持ちいいねえ。嬉しいねえ、そうなんだあ。楽しいね」という気持ちを引き出して言語化してあげるのは、言語化されることによって子どもはこれが「嬉しい」ということ、「楽しい」ということがどうゆうことなのかを会得していくのです。

自分の感じていることを、適切に言語化して表現してくれる大人が周りにいないと、子どもは、どういうことが嬉しいのか、どういう事を楽しいというのかを理解することは出来ません。

そうすることで初めて他人との共通の「嬉しい、楽しい。」を理解していくのです。だから、子どもには「その子が本当はどう感じているのか、どうしてほしいのか」という感情を引き出す言葉かけが一番大切なのです。

「嬉しい、楽しい」というポジティブな感情と同時に「悲しい、辛い。」という気持ち、感情も受け止めてあげるのもっと大切です。でも、まずは、この瞬間受け止めてあげるだけでいいのです。

「辛かったんだね。」とただ受け止めてあげると、子どもはネガティブな感情も出していいんだと感ずることが出来ます。ネガティブな感情も出していいと感ずることが出来た子どもは辛い時辛い親に言えます。辛いときは辛い顔、嬉しい時は嬉しい顔が出来るのです。

そんな子どもは、本当は辛いのに、言えなくて顔は笑ってリストカットするような子どもにはなりません。だから親も、気づいてあげることが出来るのです。親にだけは安心して本当の表情を見せることが出来るのです。親の前では子どもは受け入れられると安心していれば悪いことも含めて、何でも出来る筈なのに、受け入れてもらえないからこそ不安で、今は逆に親の前で良い子が増えています、これが「うちの子に限って」という現象ですが・・・

私達大人は、子どものポジティブな感情は受け止めやすいのですが、ネガティブな感情はどうしても、「なんでそんなこと言うの？そんなことは言わないの」と否定しやすいのです。

そして「どんなに親が愛していても、愛されなかった」と子どもは感じていきます。

親に嫌われることを恐れている子どもは気持ちをわかってもらえていない子どもです。

わかってもらえている子どもは安心して「うるさい、お母さん嫌い」と言えます。親に自分の嫌なところも出せるのです。そのことが言えた時は、子どもはすっきりとして母親に憎しみを残しません。嫌いといえた時は20年後には普通の当たり前のことを当たり前と感ずることが出来る大人になっているでしょう。

もちろん、そういう感情にさえならなかったらその子どもは、仲間からもっと信頼されているでしょう。でも、その感情を押し殺してしまった抑圧されたみせかけの良い子は切れるか、うつになるか、ひきこもるか、挫折するしかないのです。

また一方で、ネガティブな感情を、そのまま受け止めずに、**子どもが体験することでそこから何かを学ぶ前に、親がいつも何とかしてあげようしたり、体験を排除しようとした場合は、子どもはネガティブな感情を出すことで、親に愛してもらえると非意識化で学習し、いつも辛い、悲しいと感ずたことばかりを親の前に出して問題化してしまうようになることも知っておく必要があります。**だからまずはその気持ちを受け止めるだけにしておくことが大切なのです。

受け止めてわかった上で、自分が代わりにするのではなく、排除するのでもなく、**子どもにとって必要な体験を「やっでござらん」と自分でさせて、行動することを見守る、励まして援助することが親の役目です。**

見守る、待つ姿勢を持つゆとりが大人に必要です。そこで、大人が待てないで、見守れないで、子どもが学ぶ力、成長する力がないと勘違いし、つい手を出してしまうのは何故か、それは親が子育てで直面する親の育ちの問題です。

「嬉しい、楽しい、悲しい、苦しい」をわかってもらえた子どもは、嬉しいような顔の子どもがいれば一緒になって嬉しがるし、悲しそうな顔、苦しそうな顔の人がいれば、相手の苦しさや悲しさが表情を見ただけで手に取るように理解でき、手を差し伸べることが出来るのです。

自分が親にわかってもらって自分の中に育っている感情だからこそその思いやりが示せるのです。これが「思いやりであり優しさを育てること」なのです。

そして、小さな子が、泣いたら親は自分の感情が出せた、これでよかったと思うことです。

むしろその感情を出せる場を作ってあげるのが子育てでもっとも大事なポイントなのです。

これは、本園の心の教育につながるものです。説明会などで何度もお話していることですが、もう一度そのことについて述べてみます。



---「心の教育とは」---

ルールを教えるのではなく、なぜそうしないといけな
かという気持ちを教えるのが『心の教育』ではないかと考
えています。「おはよう」といいなさい、「片付けることが大
切」という事を教える事が教育ではなく、**おはようという
気持ちが良い、片付けると気持ちが良い、心地がいいん
だ、好きだ、いいなあという気持ちを教えるのが「心の教
育」**です。

この気持ちが理解できない限りしつけも子どもの心と体
の中に定着することはありません。片付けると次の人が
気持ち良いんだよ。そして自分が一番心地が良いんだと
いうことを感じる、学ぶこと。何事もなぜかということ
を教えると子どもは納得します。

なぜそうしたほうが良いのかを感じさせ「なぜ」という理
由を説明するのが心の教育なのだと思います。「なぜ」を
教えないとルールだけを守る人間になるのではないで
しょうか。心を教えないで社会のルールだけを教えておく
と、その人は間違った努力をしてしまうことになります。

「盗んではいけません」ではなく「なぜ盗んではいけない
のか」という心を育てるのが教育です。正しい事を言うの
が教育ならこんな簡単なことはないでしょう。それでは教
育には、情熱も、忍耐も、努力も要らなくなります。

「自立をしなければならない」と言うだけなら誰でも教育
は出来ます。「自分も自立をしなければ」という心に持っ
ていく事が教育であるから親も教師も苦勞するのです。
そこには、深く、大きく、広い、情熱も、忍耐も、努力
も必要なのです。勉強にしろ、遊びにしろ、雰囲気を作り、
子どもをその気持ちにさせるのが教育です。その為には、
まず大人が子どもの気持ちをわかってあげることからで
す。

次に、「心の教育」は子どもの心が満足している時に出来
ます。心を満足にしていれば黙っていても子どもは優し
くなれます。枯れた花がかわいそうと思う心を教えようと
しても、自分が辛くて満足していなければ花をかまってい
られません。

**親や先生が気持ちをわかってくれてほっとした。この満
足したという「不快が快」に変わる体験が統合されて思いや
りができるのです。**

だから子どもにとって「嬉しい」体験と同時に「辛い、苦し
い」体験も必要なのです。その体験を排除してはならない
のです。

その体験があるから同じ体験をした人に優しくなれるの
です。かわいそうの意味、「優しさや思いやり」を教えよう
としてもその意味をしらなければ子どもは理解できません。

もし、子どもが、その事に気付かないで、ただ親や他人
の承認を得ようとして言いつけを守るとすれば、その意味
がわかっているのではなく、怒られるのが嫌だからしてい
るのであって、理解しているのではないのです。

ほっとした体験をした時の気持ち、
お茶も缶で飲むよりコップに注ぎ



変えて飲むほうが気持ちよいという心、感情、こころよさを育
てる事によって心を育てます。お花が枯れてかわいそうとい
う気持ちを体感してこそ心を育てます。

すべての教育は子どもが自分の心に躍動するものがなけ
ればなりません。そしてその気持ちをわかってくれた人の言
う事を人は聞くのです。そして、子どもが素直になった時、子
どもが関わりを中心になった時に初めて「心の教育」が出来
てくるのではないのでしょうか。

しかし、時として、子どもの気持ちをわかってあげる教育は
「子どものわがまま」を助長し、甘やかしの教育になりはしな
いかと懸念される場合もあります。

**自分の感情に気づいて自分で決める教育のほうが、実は
厳しい教育なのです。親がなんでも支持して厳しくする教育
は、一見厳しいように見えるけれど、本当は何も自分で責任
を取らなくて済む、子どもにとって最も甘やかしの教育にな
るのです。**

そして、大人でも自分の気持ちをわかってくれない人の言
うことを聞けますか？子どもは、もっと敏感です。大人より思
考型ではなく、まだ感情で動く年齢だからです。わかってもら
えたから、納得してその人の話を聞くのです。個人の基本的
感情「嬉しい、楽しい、苦しい、辛い」が理解されたからこそ、
次の「優しさや思いやり」に繋がるのです。

自分の悲しいという感情を汲み取ってもらった子どもは友
達の悲しそうな顔をみるとその子が悲しいのだということを
理解できるのです。だからこそ、子どもの世界の感動もある
のです。あまりに思考型になって、感情を感じとれなくなった
大人は感動も出来ません。感動がないところには共感もな
いので、その人は次々とトラブルメーカーになりかねません。

自分の感情に気付くことが出来る人は、それはその感情と
して受け止め、いったん自分の心の中に置いて、別の行
動が選択できるからです。感情に気づけない人は、自分が
何でそんなに腹が立ったりするのかわからないので、その気
持ちは自分の心の中に留めておいておけないので、そのま
ま爆発してしまうのです。

本当の自分の感情『心の声』に気づいていなければその
声に正直になる事は無理です。自分に正直になれないとい
うことは、自分を信じることができないということに繋がります
ので、ひょっとすると自分を認めていなくて他者承認を強く求
めて苦しんでしまっている方かもしれません。

他者承認を求めてしまっているうちは、他人の承認のほう
が先ですので自分の気持ちが後になってしまうのです。もち
ろん人間社会ですから他人の気持ちを考えることはとても大
切です。

でも本当のところ自分の感情にすら気付けない人が他人
の気持ちなど気付けるはずもないのです。

そして、「私を認めて」と言っているうちは「私を認めてくれ
ない。あなたを認めない」と言う他者を否定していることにな
り、さらに相手に肯定されないという悪循環に陥っているの

です。



だから、他者承認ではなく自己承認が必要となってくるのです。と、同時に『自己責任』とは、何かが起こった時に自分で責任を取るという大きな意味もありますが、最も大切な事はその時その時の『今、ここ』の自分の感情に気付いてどのように行動するかという小さな(でも結局はとても大きな)決断を毎日毎日、一瞬一瞬積み重ねていくことが大切なのです。

大切な事は自分の心の中にいったん入れておいて、その感情を受け止めることができれば、その場に応じた行動が自分の決断で取れる人間になれるということです。「毎日の小さな積み重ねの中の小さな決断を数多く体験すること」が大切です。そのことが最も大切なことであり、それが本当の自己決断だと思うのです。それが自分の感情を自己コントロールできる洗練された大人になるということです。

そして、そのことこそが自分の人生に自己責任をとることなのです。それが自分の人生を自分の足で歩くということなのです。他者承認ばかりを求めて、相手がどう思うかばかりを気にして、他人の言動や、行動ばかりに振り回されていることは、いつも、自分に責任を取らず、他人のせいにし続け、自分の人生を他人に預けているようなものです。でも、私の心を暗くするのも、明るくするのも他人しだいという人生は寂しいですね。

自分の人生のシナリオを作るのは自分自身です。人がどう思うかに振り回され、悪い面ばかりに焦点を当てて、暗い毎日を過ごすか、「自分が感じたこと、自分がどうしたいか」に焦点を当てて、自己責任を取って、辛い、苦しいことがあっても捉えなおして明るく過ごすか決めるのも自分自身しかないので。

結論として、気持ちをわかってあげる、自分の感情に気づいて、自分で決断させる教育は、子どものわがままを助長することにはならないことはご理解頂けると思います。また逆に、そのことこそ、親が厳しく叱って、先に先に指示して、答えを出してしまう教育より、本当は自分に厳しい教育だ、そして、それが本当の人間に育つ為には必要な教育ということも理解して頂けるでしょう。

だからこそ、本当の自分の感情『心の声』に気付けるようになりましょう。感じていることは自分だけのもの、自分がそう感じているのですから誰からの批判を受けるものでもありません。だから、皆さんに伝えたいのです。そして、知って置いて頂きたいのです。皆さん自身と子ども達の教育の為に、本当に自分を信じ好きになるということは、自分の感情『心の声』に気づくことだということを。このことこそが本当の心の教育だと思うのです。

こうやって感情は、そして心、思いやりや優しさは育つのですね。そしてまた茂木健一郎さんはこう言っておられます。

思いやりと学力は比例する

このことについては次号としましょう。



追悼記2

さて、8月28日、名誉理事長の後を追うように叔父(名誉理事長の弟)が亡くなりました。

人は二度死ぬとか言われます、一度目は、亡くなった日、二度目は、その人の思い出が語られなくなった時といわれます。叔父のことを語ってくれる人はあまりいません。なので、叔父のことを少し報告させて下さい。

5月26日の母に続けてで、悲しさはつのりましたが、母が私に迷惑をかけないように連れていってくれたのでしょう。9月2日が母の百箇日でした・・・

初盆明けて、ロールレタリング学会研究大会全国大会を終えて、吉塚ゆりの樹幼稚園の新学期がはじまる前日に... 母は亡くなってからも見事な死に様で言葉もありません。今もどこかにいて、幼稚園の日程を見ているのかしらと思うくらいです。

叔父が亡くなってからのほうが、なぜかしら、喪失感が強く、涙が止まりませんが、今は二人一緒によかったのではと、安堵しています。

知的障害のあった叔父は、親戚中が厄介者扱いし、面倒を見てくれる人がいなく、父が幼稚園ならいる場所もあるだろうからと母の田舎から連れてきました。

なので、幼稚園での思い出は尽きません。元気な頃は、幼稚園の先生にはさせられない、きつい仕事や汚れる仕事を引き受けてくれました。兎や鳥の世話、植物の水やり、どぶ掃除、運動会の片付け、園バスの助手もしてくれました。

いつも愛用の帽子をかぶって・・・

知的障害ゆえ、頼まれた仕事は何時間でもけなげにやり続け、運動会のいるものがある場所などよく覚えていて、一度したことは忘れないので、すぐに持ってきてくれました。ある意味で、名誉理事長と共に、このゆりの樹幼稚園の礎を築いてくれた功労者です。

園に飛び込んできた雀が死ぬと泣き続ける・・・子どもの心を忘れることがない、いつまでも、邪気のない、正直であどけない憎めない叔父、私にとっては、本気でけんかもする弟のような存在でした。

私が小学校低学年で、一緒に暮らし始めた当初は、初めて5歳から10歳位の精神年齢の叔父に翻弄されました。一人娘だった私に急に弟が出来たようで、けんかをしても、父に「喧嘩をどうする、我慢しなさい」と言われ、本当のきょうだいだったらちゃんと、どちらが悪いといってもらえるのにと、情けない思いもしました。

言い出したら聞かないので、けんかになるのですが、それは純粹でけなげが故だったと今になってわかります。

私が小学校の頃、忘れ物をすると、母は幼稚園が忙しいので、叔父が届けてくれました。私は叔父に「教室

まで来たらいいかんよ」と言っていました。それは、友達に叔父を見られるのが恥ずかしかったからなのです。

「昇降口のところで待っていて」というと、何時限目の休み時間に来るかわからない私をずっと待っていてくれたのです。またそれが許される優しい時代だったのでしょう。今だとすぐに「不審者」として通報されたかもしれませんね。

また、女学生時代、父に「迎えを頼むね」と言われた叔父は雨の日や夜遅くなると、頼まれない日も、時間も日にちもわからないので、私の迎えをするのに、夕暮れになると、何時間もバス停で待っていてくれました。それが恥ずかしく、先に帰った日に限って雪になって、その中ずっと待ってくれたことを後で知りました。

今でも悔やまれます。

そして、私の子ども達をいつもおぶって子守もしてくれ、元気な頃は本当によく手伝ってくれました。

知的障害があり、私もきつい思い、嫌な思い、子どもの頃は恥ずかしい思いもしたこと多々ありますが、今は感謝の気持ちで一杯です。

一時期、別の病院に入院していましたが、7年前、母が90歳で脳梗塞に倒れてからは、介護付き老人ホームで再び仲良く一緒に暮らし、最後を迎えました。

亡くなる前まで、知的障害の特有の顔つきでしたが、最後は修行僧のような、即身成仏かのような顔で亡くなりました。

私は「**自他受容**」と「**いかに無執着でいられるか**」、その結果として「**そこにそのままの自分**でいる」ことを心理学の学びの目的として生きてきました。

叔父の姿を振り返る時、死して「人として何が大事であるか」、そして、彼こそが「**真の無執着と自他受容**」をしていたのではないかと感じます。

「いかに真摯に正直に生きるとは何か、」ということを教えてくれたような気がしています。一番の、お手本は側にいたのです。

神仏が姿を変えて、私達に道を示されている示現が「知恵遅れの叔父の汚れることを知らない生き様」であったと...

一時代の終わりを感じます。

悔やまれることも多く、悲しみも重なりましたが、私の好きな言葉を口ずさみ、そして、主人が送ってくれた言葉を胸に新学期も教職員心ひとつに、頑張ります。

子ども達の成長、ひいては自分の成長のために...

私の好きな言葉

『人間 日々成長

山を一つ越えるたびに強くなれる

河を一つ越えるたびに優しくなれる

困難を一つ越えるたびに豊かになれる。

すべて必然、自分の成長の為に用意されたステージ。
だから、すべて大丈夫。』

やはり、どんな過去も受け止めて、それがあったから今の自分があると感謝して生きていく...そこから学んでいく...それしかない...それが人生なのでしょう。

苦しいのは生きているあかし。悔しく、悲しいのは一生懸命生きている証拠。そして苦しみ、悲しみ、を受け止めた後に成長があるのでしょ。その時を楽しみに待ちましよう。諦めなければ、一生懸命生き続ければ必ずその時はやってくるでしょうから...

洋史先生が送ってくれた紀元前の叙事詩の言葉です。「人生を精一杯生きてきたけれど、報われなかったな

あ...」という言葉です。この言葉を教えてもらった時は意味が分かりませんでした。

そして、次にマザーテレサの言葉を教えてください。

「一生懸命頑張っても報われないのが人生である。それでもなおあきらめないで続けることだ」

この言葉に出会った時にこの叙事詩が理解できました。紀元前の人は最後まで言わなくてもその言外の意味を理解できたのでしょうか。だから叙事詩として残っているのでしょうか

マザーテレサの言葉

「人は不合理、非論理、利己的です。

それでもなお、人を愛しなさい。



あなたが善を行うと、利己的な目的でそれをしたと言われるでしょう。それでもなお、善を行いなさい。

目的を達しようとするとき、邪魔立てする人に出会うでしょう。それでもなお、やり遂げなさい。

善い行いをしても、おそらく次の日には忘れられるでしょう。それでもなお善を行い続けなさい。

あなたの正直さと誠実さが、あなたを傷つけるでしょう。それでもなお正直で誠実であり続けなさい。

助けた相手から恩知らずの仕打ちを受けるでしょう。それでもなお助け続けなさい。

築きあげたものが一瞬にして崩れ去ることがあるでしょう。それでもなお、築きなさい。

あなたの中の最良のものを世に与え続けなさい。けり返されるかもしれませんが。それでもなお、最良のものを与え続けなさい。あなたは、あなたであればいい。」

一生懸命生きて、そしてたとえ、「**自他受容**」と

「いかに無執着でいられるか」が手に入れなくても、報われなくても「それも私」と受け止め、目的に向かって学び続けましよう...再び二人に出会う日まで

きっと大丈夫、諦めなければ何かが残ります...

それが、二人への一番の鎮魂となると感じています。

